

# 鯨の「正しい」名前とは何か

——校訂版『白鯨』第45章の本文校訂批判——

佐藤 憲 一

“This whole book is but a drought——nay, but the draught of a draught.”

Herman Melville, *Moby-Dick or The Whale*, Ch.32.

## はじめに

1988年、ノースウエスタン大学出版局とニューベリー図書館が共同して、ハーマン・メルヴィル (Herman Melville) の『白鯨』 (*Moby Dick or the Whale*) を出版した<sup>1</sup>。このテキスト (=本文) は、G・トマス・タンセル (G. Thomas Tanselle) とハーシェル・パーカー (Hershel Parker) という2人の書誌学者が本文校訂にあたった、『白鯨』唯一の校訂版 (critical edition) である。

ここで簡単に校訂版『白鯨』の位置を明確にしておこう。現在日本で『白鯨』として知られている作品は、1851年10月18日にイギリスで『鯨』 (*The Whale*) という題のもとで初めて出版された。アメリカでは『モービー・ディック、あるいは鯨』 (*Moby-Dick; or the Whale*) という題のもと、そのほぼひと月あとの11月14日に初版が出た。校訂版『白鯨』の「本文注」 (“Note on the Text”) によるなら、それ以来この作品は、少なく見積もっても60回以上印刷されたという (776)。しかし幾多ある『白鯨』のなかでも、本文をめぐる問題に注意を払っているのは、オックスフォード版 (1947年)、ラインハート版 (1948年)、リバーサイド版 (1956年)、ヘンドリックスハウス版 (1952年)、旧ノートン版 (1967年)、旧ペンギン版 (1972年) の7つの版に限られていた。逆に言うと、校訂版以前の『白鯨』の本文はそれだけ多様な形で存在していたということだ。このような状況を是正し、標準的な『白鯨』のテキストを構築するのが校訂版に期待された役割であった。そして、近年に出版された『白鯨』の代表的な版<sup>2</sup>がすべて校訂版のテキストを無批判で踏襲していることから考えるならば、出版後現在にいたるまで校訂版『白鯨』は期待された役割を十全に果たしている、といえる。校訂版の力によって『白鯨』の本文はひとつになったのである。

しかしこの校訂版には、まったく欠陥がないわけではない。いやむしろ、あまりに完璧な校訂を期したがための問題が幾多あり、それらはとくに校訂者によって「事実の取り違い」(“factual error”)に分類されている本文異同の箇所に見られる。紙幅の都合上、今回これらすべての問題点を論ずることは不可能であるから、本論では第45章に登場する2頭(あるいは3頭)の鯨の名前に校訂者が施した「修正」に議論を限定したい。

本論はまず、校訂版が採用したテキスト校訂の理論を概観し、ついで第45章の当該箇所を実際に検討する。その後、現行の校訂版には、歴史的見地から見ても虚構的見地から見てもきわめて不当な修正が施されてしまったこと、より具体的には、校訂によって鯨の名前が歴史的事実<sup>3</sup>に照らして「正しく」直された結果、皮肉にも『白鯨』45章の虚構性と歴史性とが同時に消失するという事態が生じてしまっていることを明らかにしたい。

## 1. 校訂版テキストの生成

『白鯨』のテキスト校訂者は、次のように記述している。

This edition of *Moby-Dick* presents an unmodernized critical text, prepared according to the theory of copy-text formulated by Sir Walter Greg. . . The resulting text is critical in that it does not correspond exactly to any single authorized edition, but it is closer to the author's intentions — insofar as they are recoverable — than any such edition. (763-4; underline mine)

下線部で言及されている、「グレッグが系統立てた底本<sup>3</sup>理論」とは、本文書誌学で「グレッグ理論」と呼ばれている、校訂版テキストを構築するための底本選定理論をさす。これは、現存する手稿や異本等から「最良の本文」(“best text”)を構築するために、近代書誌学の嚆矢サー・ウォルター・グレッグ (Sir Walter Greg [1875-1959]) が提唱した理論であり、近代書誌学の最大の成果のひとつとされる。グレッグ理論についてその全貌を記す余裕がないので、ここではその要点のみを確認しておきたい<sup>4</sup>。

グレッグ理論以前は、編者がある特定の版(「自筆原稿」・「初版」・「作者生前最後の版」など)をあくまで恣意的に底本とし、それをもとに校訂版の本文がつけられた。しかしグレッグ理論はまずこの恣意性を極力排除しようとして、底本の選定基準を明確にした。グレッグはまず、底本となりうる複数の候補から底本を選定するさいに「語の意味の面」における各版の間の異同 (“substantives”; 以下< s >

とする)と、「語の形式の面」における各版の間の異同(“accidentals”;以下<a>とする)とを区別した。簡潔にいうなら、<s>とは、作者がかかわる<意味>の面での異同を、<a>とは植字工などの技術者がかかわる<形式>面での異同をさす。そしてグレッグは、この両者を区別した上で、底本には<a>の面から見て最も妥当な版(清書原稿または初版となることが多い)を選定することを提唱した。

グレッグの底本理論によるテキスト校訂の革新性は、こうして<a>を重視する立場から選択した底本に<s>の面の修正を組み込んで最良の本文を作る手法を確立した点にある。つまりグレッグは、<a>の観点からみて誤記・誤植が少ない版を底本に設定し、そこに作者が生前に行った改変(“authorial revision”)を適宜組み込むことで、作者の「意図」を総合的に汲み取った、そして作者の「意図」に最も近い「最良のテキスト」を復元する——より正確には、創造する——ことができると考えた。これがグレッグの底本理論を基に生成する校訂版のテキストである。

ここで、グレッグ理論にしたがって作られる校訂版テキストの正体を知るために、校訂版テキストが出来するまでの流れを例示しておこう。作者AのXという作品の校訂版が作られる場合、作業は次のように進む。まず、この作品の初版、あるいはその清書原稿が残っている場合には、初版が清書原稿のうち<a>の観点から判断して妥当なもの、つまり、単純な誤植等がより少ないものが底本とされる。ここでは初版(=X1)が底本となったと仮定しよう。校訂者はまず、自ら選択した底本に<a>の面から見た若干の修正を施す。ところで、作者Aが生前、このXという作品に3度、手を加えたとする(=X2、X3、X4)。すると最終的には、X2~X4に対して施された、作者による修正(これは主に<s>であることが多い)が底本(=X1)に組み込まれる。これは必然的に、作者Aが生前出版したXという作品の計4つの版(X1~X4)全てと異なる。このように、グレッグ理論によって構築される校訂版テキストとは、ある時点でのXという作品(=X<sub>n</sub>)を基にしたものではなく、Xという作品のすべての異本を組み合わせた(=X1+X2+X3+X4)ものなのである<sup>5</sup>。先の引用において、「校訂を経た」(“critical”)テキストが「作者の生前に出版されたいずれの版とも完全には照応しない」(“does not correspond exactly to any single authorized edition”)とされている所以は、ここにある。校訂版『白鯨』のテキストは、このような理論に従って画定されたのであった。

校訂版『白鯨』の底本に選択されたのは、アメリカ版初版の『白鯨』である。冒頭で触れた通り『白鯨』は1851年11月にアメリカで版されるひと月前に、イギリスで『鯨』という題のもとで出版された。問題は、これら2つの『(白)鯨』の本文のあいだに数々の異同があるということなのだが、このような異同が生じた理由については、メルヴィルの手書き原稿や清書原稿が現存しないため、明らかではな

い。これらの異同は、作者メルヴィルのミスと修正を物語るようにも見える一方で、植字工のミス、校正者や編集者の介入である可能性も否めない。

では、校訂版がアメリカ版初版を、メルヴィルの手書き原稿に最も近いものとして底本に選択した理由は何か。それは、アメリカ版が、「メルヴィルの手書き原稿から直接タイプされた」（783）から、とされている。先に出版されたイギリス版『鯨』は、メルヴィルの手書き原稿からではなく、9月10日にロンドン宛てに郵送された校正刷りからタイプされた。一方のアメリカ版『白鯨』は、メルヴィルの手書き原稿から直接活字になった（764-767）。つまり前者よりも後者のほうが、作者以外の人物——植字工やタイプスト——の手になるミスが介入する可能性が低い、ということだ。

こうして校訂者はアメリカ版初版の『白鯨』を底本にしつつ、ふたつの版の異同をつき合わせて校訂版のテキストを構築してゆくわけだが、彼らはその過程でふたつの大きな問題に直面したという。「本文注」には次のようにある。

After adopting the obvious corrections from the English substantive variants... the editor faces two problems. The first is to determine which of the remaining English variants are authorial and should therefore be adopted as Melville's revisions. The second is to find and correct any readings that are erroneous in both editions — readings, that is, where the English text follows the American in printing words that cannot be the ones Melville intended. (783)

第一は、イギリス版におけるアメリカ版との相違箇所のみならず、とくにメルヴィルの意向が反映されている（“authorial”）のはどれか、という問題である。先に確認したとおり、アメリカ版はメルヴィルの手書き原稿をもとに、イギリス版はその校正刷りをもとに、活字になった。この場合考えられるのは、イギリスに送られた校正刷りにメルヴィル自身が手を入れていたのではないかということだ。仮にイギリス版の本文がメルヴィルの手による修正を経たものであるならば、これらはアメリカ版の底本に組み込まなければならない。しかし問題は、どれがメルヴィルの施した修正かを確定するのが難しい、という点にある。第二の問題は、メルヴィルが「意図」していないにもかかわらず、アメリカ版初版・イギリス版初版の両方に残ってしまった「誤った」（“erroneous”）記述をどのようにして発見し、どのように修正するか、というものである。

それぞれの場合において校訂者がどのような修正を行ったか（あるいは、行わなかったか）については「本文注」（780-797）に詳しいので、ここで詳述することは

避ける。しかし気をつけなくてはならないことは、『白鯨』の手書き原稿や清書原稿の類が一切現存しない以上、校訂者が直面したこれら二つの問題にたいする決定的な解答は永遠に得られない、ということだ。ではこの場合、この二つの問題系に属するテキスト異同になんらかの処置を施す（あるいは、施さない）規準はどこに求められるのだろうか。結局は校訂者の好みに、ということになるだろう。この点において、『白鯨』というフィクションの校訂版テキストを作り上げてゆくという作業は、校訂者が『白鯨』というフィクションをどう読むかという問題に直結する。そして当然のことながら、校訂者の読みが常に正しいというわけではない。以下に示すのはその端的な例である。

## 2. 「トム」か「ジャック」か

校訂版『白鯨』の第45章から引用する。下線部に注意を促したい。

Was it not so, O Timor Jack! thou famed leviathan, scarred like an iceberg, who so long did'st lurk in the Oriental straits of that name, whose spout was oft seen from the palmy beach of Ombay? Was it not so, O New Zealand Tom! thou terror of all cruisers that crossed their wakes in the vicinity of the Tattoo Land? Was it not so, O Morquan! King of Japan, whose lofty jet they say at times assumed the semblance of a snow white cross against the sky? [...]

But this is not all. New Zealand Tom and Don Miguel, after at various times creating great havoc among the boats of different vessels, were finally gone in quest of, systematically hunted out, chased and killed by valiant whaling captains. [...] (205; underline mine)

ここは語り手が鯨捕りの間で有名な鯨を列挙しているくだりである。以下、簡潔な議論を期すために、はじめの下線部の鯨を〔鯨①〕、次の下線部の鯨を〔鯨②〕、最後の下線部の鯨を〔鯨③〕と名づけることにしよう。

問題は〔鯨①～③〕の名前にある。実は、「校訂版」以前のテキストにおいては、これらの〔鯨①～③〕の名前はあべこべであった。一例に旧ペンギン版（1972）のテキストを引用しておく。

Was it not so, O Timor Tom! thou famed leviathan, scarred like an iceberg, who so long did'st lurk in the Oriental straits of that name, whose spout was oft seen from the palmy beach of Ombay? Was it not so, O New Zealand Jack! thou

terror of all cruisers that crossed their wakes in the vicinity of the Tattoo Land? Was it not so, O Morquan! King of Japan, whose lofty jet they say at times assumed the semblance of a snow white cross against the sky? [...]

But this is not all. New Zealand Tom and Don Miguel, after at various times creating great havoc among the boats of different vessels, were finally gone in quest of, systematically hunted out, chased and killed by valiant whaling captains. [...] (305; underline mine)

校訂版では、[鯨①]が「ティモール・ジャック」、[鯨②]が「ニュージーランド・トム」、[鯨③]が「ニュージーランド・トム」となっているのにたいし、旧ペンギン版においては、[鯨①]が「ティモール・トム」、[鯨②]が「ニュージーランド・ジャック」、[鯨③]が「ニュージーランド・トム」となっている。校訂版においては鯨は2頭しか登場しないが、旧ペンギン版においては3頭の鯨が登場する。表に示したように、「校訂版」以前の『白鯨』の代表的な版は、イギリス版初版を除いて全て、ここに紹介した旧ペンギン版と同じ本文を採用している。

表

存在した [鯨①~③] の名前	American 1st. (1851)	English 1st. (1851)	Hendrix House (1952)	Penguin (1972)	Critical Text (1988)
① Timor Jack	Timor Tom	Timor Tom	Timor Tom	Timor Tom	Timor Jack
② New Zealand Tom	New Zealand Jack	New Zealand Jack	New Zealand Jack	New Zealand Jack	New Zealand Tom
③ New Zealand Tom	New Zealand Tom	New Zealand Jack	New Zealand Tom	New Zealand Tom	New Zealand Tom
<事実>との照合	▲	×	▲	▲	○
語りの一貫性	×	○	×	×	○

いうまでもなく、校訂版以前のテキストに出現する「ニュージーランド・トム」という、[鯨①]と[鯨②]の名前を組み合わせた[鯨③]の名前は、注意深い読者にある種の違和感を与える。言葉を換えるならば、この名称は読者の期待を裏切るものである。イギリス版初版を除いた校訂版以前の『白鯨』における当該箇所の本文は、語りの一貫性という観点から見ると、少々<おかしい>のである。

表に示した通り、この<おかしさ>はそもそも、アメリカ版初版に存在した。そして、イギリス版初版こそ例外的に、[鯨③]の名前を「ニュージーランド・ジャック」とすることでこの箇所の<おかしさ>を取り除いているものの、その後の代表的なふたつの版はこの場所になんら手を加えていない。つまり、130年以上にわたってアメリカ版初版の<おかしさ>は放置されてきたというわけだ。

原理的には、テキストのなかにこうした<おかしい>場所をみつけたうえで、手稿や異本とつきあわせ、ときには修正をしたり、ときには削除をしたり、またときには注釈を施したりすることで、その<おかしさ>を極力緩和させようと努めることが、テキストを校訂するという作業である。いま論じている箇所<おかしさ>に注目した議論を展開したのは1988年の校訂版が最初であり、その功績自体は否定されるべきではない<sup>6</sup>。

しかし、2人の校訂者はこの箇所をどのような価値基準にしたがって校訂したのだろうか。そして、その結果どのようなテキストが出現したのだろうか。これらの点に注目するなら、彼らの校訂に諸手を挙げて賛成することはできなくなる。まず「本文注」はこの箇所を「メルヴィルが原稿の中でおかしたと考えられる、事実の誤記や書き間違えの類」(“factual errors or other slips probably made by Melville in his manuscript”; 792)ととらえ、「単に語句を置き換えることでこうしたミスが修正されうるのであれば、必要な修正を施す」(when a simple substitution will correct them, the necessary emendation is made; 793)と断言している。

つぎに、「採用した読みをめぐる詳論」(“Discussions of Adopted Readings”)のセクションから、彼らがいま論じている箇所に付したより詳しい注釈をみてみよう。長文になるが、全文を引用する。

In American first edition this whale is called “Timor Tom” and the whale three lines later “New Zealand Jack”; but when the name “New Zealand Tom” appears in the first line of the next paragraph, it becomes clear that a mix-up has occurred. English first edition, in an attempt to correct the error, makes the simplest change that will produce consistency—changing “Tom” to “Jack” in the third instance. However, two books Melville used as sources settle the matter: the whales are “New Zealand Tom” and a nameless Timor Whale in Frederick Debell Bennett, *Narrative of a Whaling Voyage* (London 1840), II, 220, and both “Timor Jack” and “New Zealand Tom” in Thomas Beale, *The Natural History of the Sperm Whale* (London 1839), p. 183, in his copy of which Melville marked this passage and underlined “Timor Jack”. (867)

メルヴィルは現実に存在した2頭の鯨の名前を混同してしまったに違いない。このミスを繕うためにイギリス版初版は〔鯨③〕の名前の「トム」を「ジャック」にかえた。ここまではよい。問題はこの後の記述である。果たしてメルヴィルが情報源とした2冊の書物の記述を持ち出し、「本文注」に示されている原則どおりに「ト

ム」と「ジャック」を「置き換える」ことで事は足りるのだろうか。より具体的には、「ニュージーランド・トム」なる鯨が歴史的に存在した（らしい）からといって、「ニュージーランド・ジャック」を誤記と考え、これを歴史上に存在した鯨の名前に訂正することによって本当に「問題は解決する」のだろうか。

解決するわけがない。いや、そもそも、ここにはこのような「問題」自体が本当に存在するのだろうか。もちろん、いま引用した注の後半部の指摘を承認するならば、メルヴィルは「ティモール・ジャック」あるいは「ニュージーランド・トム」という実在の鯨の名前を知っていたと推測できる。したがって、メルヴィルが意図的であったか、そうでなかったかは別にして、この箇所が「混同」であることに異論を挟むのは難しい。しかし、フィクションのテキストのなかでメルヴィルが鯨に与えた名称と、実在した（であろう）2頭の鯨の名前が一致していなければならない理由はいったいどこにあるというのか。それは校訂者の好み以外のどこにも求めることができないのである。

確認しておくが、グレッグ理論以前と以後の違いは、校訂版テキストを作成するための方法が組織化されているかいないかという点にあるのであり、その方法が恣意的であるかないかという点にあるのではない。底本選定における恣意性を極力排除しようとしたグレッグ理論も、実はその内部に恣意性を抱えざるを得ないのだ。とどのつまりは、[鯨①～③]の名称に一貫性がないことが「問題」であるのは、結局彼らの読みの次元の、つまり解釈上の話なのである。よって彼らとは異なる読みの立場からみるなら、実はそこには「問題」自体が存在しないということになる。

### 3. 消された虚構性

そもそも『白鯨』は、発表当時どのように読まれたのであろうか。もちろん、個々の一般読者の反応については知る術もない。しかし、発表当初の『白鯨』をめぐる言説が示していた傾向についてはうかがい知ることができる。『ダブリン・ユニバーシティー・マガジン』の1852年2月号の書評子は、「これまでフィクションの作品のつくりかたを規定すると考えられてきたすべての決まりごとは『白鯨』によって】さげすまれ、無に帰せられてしまった」（qtd. in Branch 27）と述べている。多くの書評子は『白鯨』を前にして混乱した。

『白鯨』は「事実とロマンスとのできの悪いまぜこぜ」（『アテネウム』誌1851年10月25日；qtd. in Branch 253）で、「どこが真実でどこが虚構かわからない」（『デイリー・クーラント』紙1851年11月15日；qtd. in Branch 263）ような作品である。本質的に、というのではなく、あくまで共時的にどのように理解されたかという意



味において、『白鯨』は「さまざまな顔をもつ」（『スピリット・オブ・ザ・タイム』誌 1851 年 12 月 6 日；qtd. in Branch 283）、「奇妙な寄せ集め」（『モーニング・クロニクル』誌 1851 年 12 月 20 日；qtd. in Branch 288）なのであった。

見逃すことができないのは、作者であるメルヴィル自身が意図的にこうした評価をよぶような小説を作った可能性がある、ということだ。「細心に注意を払った無秩序こそ真の方法であるような仕事もある」（361）とは第 82 章冒頭の一節だが、これは『白鯨』というフィクションが指向するものを雄弁に物語っているのではないだろうか。そもそも『白鯨』というフィクションは、一貫性や調和に重きをおく、いわゆる科学的で安定的な思考を、そしてとどのつまりは、小説という文学ジャンルを、根底から揺さぶろうとしたのではなかったか。第 23 章で突如「墓標なき神の墓」に葬られてしまうバルキントン。所々に姿を現す劇形式の章。第 85 章冒頭に書き込まれた、メルヴィル自身が原稿を書いているリアルタイムの時間<sup>7</sup>。まさに『白鯨』とは「奇妙な寄せ集め」に他ならないのである。

こうしてみるなら、鯨の名前の非一貫性から読者が受ける違和感を、単に歴史的事実に照合させることによって「解決する」とした校訂版は、『白鯨』というフィクションが指向したものを一顧だにしていない、という重大な過ちを犯していることがわかるだろう。校訂者は、『白鯨』というフィクションを特徴づけている虚構性のある部分を一方的に消去してしまったのである。この罪は重い。

たしかに、ナラティブの一貫性という観点からは、現行校訂版のテキストは妥当であるかのように思える。しかし、この点に対しては 2 つの観点から反論できる。

第一に注意しなければならないのは、問題の 2 頭（あるいは 3 頭）の鯨が出現するくぐりに書き込まれている別の 2 頭の鯨の名前（“Morquan” および “Don Miguel”）が、全くの作り物であるという点だ。「モーカン」と「ドン・ミゲル」については、現行の校訂版が沈黙する一方で、旧ペンギン版（791）とヘンドリックス・ハウス版（721）がともにメルヴィルの創作であることを明示している。校訂版は、ここに登場する都合 5 頭の鯨のうちの 2 頭だけを歴史的事実に一致させ、ナラティブに一貫性をもたせたと自負するわけだが、残りの鯨の名前が完全な作り物である以上、メルヴィルがあえて「トム」と「ジャック」をあべこべにしたという可能性も否定できない。このように考えるなら、校訂版はナラティブの一貫性を重視したあまり、図らずも当該箇所におけるメルヴィルの〈意図〉の一貫性を消してしまった可能性すら指摘できる。

もちろん、この反論に対しては更なる反論が予期される。それはつまり、校訂版が問題の 2 頭の鯨の名前を歴史的事実に一致させたことで、結果的に「事実とロマンスのまぜこぜ」という同時代の評価に沿うテキストが出現したのではないかと、と

いうものだ。けれども、1851年に『白鯨』を評した記事は、「トム」と「ジャック」が歴史的事実と完璧に整合しているような『白鯨』を知らないのであるから、そのような反論は的外れだ。1851年に出版された『白鯨』のテキストを、1988年に、他の誰かが、作者メルヴィルが見たこともないような形に直すということは、そもそも論理的にありえないことなのである。

第二に、先に引用した「採用した読みをめぐる詳論」も認識している通り、一貫性の問題についてはイギリス版初版が解決済みである、と考えることができる。イギリス版初版においては、[鯨①]が「ティモール・トム」、[鯨②]および[鯨③]がともに「ニューゼaland・ジャック」となっており、これらは歴史的事実とは一致しないが、ナラティブの一貫性は一部の隙もなく保たれているのではないか。しかし現行「校訂版」は、このイギリス版における、たしかに付け焼刃的ではあるが、実に『白鯨』らしい——みるからに脆弱な——一貫性を、単に「歴史的事実と合致しない」という極めて恣意的な理由において、否定してしまったのだ。

以上を踏まえるなら、校訂版『白鯨』第45章に施された「修正」は、どんなに控えめに見ても、校訂者によるフィクションのテキストに対する過度の介入であるといえる。そしてそればかりか、この「修正」は、メルヴィルが『白鯨』においてまさに否定しようとした価値基準——安定的かつ不変の〈歴史的事実〉という尺度——に即して行われているという点において、むしろ『白鯨』というフィクションのテキストにとって有害であるとさえいえる。極論を恐れずにいうならば、『白鯨』とは、これら3頭の鯨の名前がそれぞれ違っていても十分に成立しうる、いやことによると、むしろそれぞれが違っていたほうが自然であるとさえいえるようなフィクションなのである。

#### 4. おわりに——間違いの歴史性

もちろん、『白鯨』のなかの、ある鯨の名称を示す記号が、実際に存在した鯨の名称と合致するからといって、その記号と現実存在した鯨とは1対1で対応しているわけではない。その一方で、『白鯨』のなかの、ある鯨の名称を示す記号が、実際に存在した鯨の名称と合致していないとしても、その記号は現実存在した鯨の名称を指示する機能をもつ。つまり、『白鯨』45章に出現する[鯨①～③]の名称が、現実の鯨そのものではなくて、あくまで鯨の表象である以上、鯨の名前は歴史的事実に即していてもいなくても、純理的にはどちらでもよい。しかし、作者メルヴィルが見たこともないような『白鯨』のテキストが、グレッグ理論の名の下に文字通り創造されてよいはずがない。現行校訂版があえて[鯨①～③]の名前を実

在の鯨に即して「修正」したことは、『白鯨』というフィクションのテキストに固有の歴史性を無視した時代錯誤的暴挙にほかならないのだ。

最後に、あまりにも有名な一節を引用しよう。『白鯨』32章（「鯨学」）において、鯨は次のように定義されている。

Next: how shall we define the whale, by his obvious externals, so as conspicuously to label him for all time to come? To be short, then, a whale is A SPOUTING FISH WITH A HORIZONTAL TAIL. (137)

当然のことながら、生物分類学上、鯨は哺乳類である。しかし『白鯨』というフィクションの中における鯨とは、「水平の尾鰭をもつ、潮を吹く魚」なのであって、それ以外の何者でもない。同じ章に明示されているように、メルヴィルは鯨が魚類ではないことを知りながら、あえて間違いを書いたのだ。

1851年に、「鯨が魚である」という〈間違い〉を意図的に明言するフィクションが書かれた。そして、この〈間違い〉は歴史的事実でもある。したがって、この〈間違い〉を勝手に〈正しく〉直すということは、『白鯨』の虚構性ばかりか、歴史性を消すということを意味する。当然、タンセルとパーカーはこのヶ所を一切「修正」していない。

しかし、一方で彼らは〔鯨①～③〕の名前を、歴史的事実に即して「修正」した。そして結果的にその箇所に固有の歴史性を——虚構性もろとも——消してしまった。タンセルとパーカーは、なぜこのことに気がつかないのか。『白鯨』第45章における〔鯨①～③〕の名前は、歴史的事実に照らして〈正しく〉ないほうが断然よい。歴史的事実に照らして〈間違っ〉ている鯨の名前は、歴史的事実に照らして〈正しく〉直された鯨の名前よりも、歴史的なのだから。

## 注

- 1 Melville, Herman. *Moby-Dick or The Whale*. Eds. Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle. The Writings of Herman Melville. Evanston: Northwestern UP and the New Berry Library, 1988. 以下『白鯨』の本文および各種注からの引用は、特に断りのある場合を除いて、この版からの引用とし、( ) 内にはページ数のみを記す。
- 2 たとえば、現行ペンギン版（1992年）や新ノートン版（2002年）など。
- 3 「底本」(copy text) の定義については、次の簡潔な一文を参照されたい: A critical edition of a book will be set from a particular basic text, and the chosen original is called the copy-text (Gaskell 338). 「底本」という訳語については山下（1983）に従った。
- 4 詳細についてはGreg（1950-51）を参照。本文校訂一般については、山下（1992）が詳しい。

- 5 グレック以前ならば、事情はこうなる。校訂者はまず、あくまで自らの好みにしたがって、ある特定の版あるいは手稿又は清書原稿を底本にする。たとえば、作家 Y の B という作品の底本として、初版 (BF) でも手稿 (BM) でもなく、生前最後の版 (BL) が選択されたとする。この場合、校訂者の仕事は BL の本文に対し、主に < a > の面から修正を加えてゆく、という作業に限定される。そのさい、BF および BM 各々と BL との間の < s > の面における異同は考慮されない。山下 (1983) が指摘しているように、これはある特定の版の「リプリント＝再版」の域を出ない。
- 6 1952 年のヘンドリックス・ハウス版もこの箇所に注を付してはいるものの、その内容は実在した 2 頭の鯨をめぐる歴史的な記録に終始するものであり、本文書誌学的な注意は喚起されていない。
- 7 “fifteen and a quarter minutes past one o'clock P.M. of this sixteenth day of December, A. D. 1850.” (370) ちなみにこの箇所もアメリカ版初版においては“1851”となっており、本文校訂上の問題が存在するが、本稿では立ち入らない。

参考：代表的な日本語訳における [鯨①～③] の名前

Historical Fact	阿部知二訳 (1957)	坂下昇 (1973)	千石英世 (2000)
① Timor Jack	Timor Tom	Timor Tom	Timor Tom
② New Zealand Tom	New Zealand Jack	New Zealand Jack	New Zealand Jack
③ New Zealand Tom	New Zealand Tom	New Zealand Tom	New Zealand Jack

尚、目下準備が進められている岩波文庫版の新訳における [鯨①～③] の名称は、現行校訂版の本文に準拠したものになる模様。貴重な情報を提供してくださった訳者の八木敏雄氏に対し記して謝意を表します。

## Works Consulted

- Branch, Watson G, ed. *Melville: The Critical Heritage*. London: RKP, 1974.
- Gaskell, Philip. *A New Introduction to Bibliography*. 1972. New Castle: Oak Knoll, 1995.
- Greg, Sir Walter. “The Rationale of Copy Text.” *Studies in Bibliography*. III (1950-51): 19-36.
- McKenzie, D. F. *Bibliography and the Sociology of Texts*. Cambridge: Cambridge UP, 1999.
- Melville, Herman. *Moby-Dick or The Whale*. Eds. Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle. The Writings of Herman Melville. Evanston: Northwestern UP and the New Berry Library, 1988.
- . *Moby-Dick or, The Whale*. Eds. Luther S. Mansfield and Howard P. Vincent. 1952. New York: Hendricks House, 1952.
- . *Moby-Dick or, The Whale*. Ed. Harold Beaver. Harmondsworth: Penguin, 1972.
- . *Moby-Dick or, The Whale*. Introd. Andrew Delbanco. Notes. Tom Quirk. New York: Penguin, 1992.

- . *Moby-Dick*. Norton Critical Edition. Eds. Hershel Parker and Harrison Hayford. New York: Norton, 2002.
- . ハーマン・メルヴィル. 『白鯨』. 阿部知二訳. 岩波文庫, 1956 - 57.
- . ハーマン・メルヴィル. 『白鯨』. 坂下昇訳. 講談社文庫, 1973.
- . ハーマン・メルヴィル. 『白鯨』. 千石英世訳. 講談社文芸文庫, 2000.
- Tomiyama Takao. 富山太佳夫「歴史記述はどこまでフィクションか」『岩波講座文学9 フィクションか歴史か』岩波書店, 2002 : 17-40.
- Yagi Toshio. 八木敏雄. 『『白鯨』解体』. 研究社, 1986.
- Yamashita Hiroshi. 山下浩. 「本文批判の問題」. 『夏目漱石事典』三好行雄編 学燈社、1992 : np.
- . 「書誌学用語解説(Ⅱ)」『筑波英学展望』2 (1983) : 99-110.
- . 「書誌学用語解説(Ⅲ)」『筑波英学展望』3 (1984) : 95-105.